

大阪府高等学校社会（地歴・公民）科研究会（<http://oh-syaken.com/>）

創立60周年記念BORNEO研修旅行 報告

～ 教育情報共有化への旅Ⅰ ～

大阪府立三島高等学校 金田 修治

2008年8月5日から13日までの9日間の日程で研究会創立60周年記念BORNEO研修旅行を実施した。この旅行は、筆者が07年JICA教師海外派遣でマレーシアを訪れて知った“現実”をぜひ社会科の教員とも共有したいと考えての発案であった。加えて、本研究会が文部科学省の教育情報共有化促進モデル事業を受けて推進してきた、教員の持てる教育情報をICTを活用して共有化し、生徒の“学力”の向上につなげようという取り組みの精神を踏まえ、この研修旅行を参加者だけのものにせず、事前研修・パンフレット作り・事後の総括・集録作成という形で、各教員の“目”を共有しながら、個人旅行では決して見ることができない熱帯ボルネオ（カリマンタン）島の“今”を貪欲に切り取って帰り、事後に教材を開発することをめざした。その過程では研究会HPを大いに活用し、07年の筆者のボルネオ体験共有化HP（事前のHP）にリンクさせ、人的ネットワークを活用した3回の研修旅行説明会兼講演会とそのまとめをそのHPに集約することで、熱帯島が抱える諸課題をビジュアルに閲覧し、参加者が事前の知識とし、自らの研修課題を探していただけるように工夫した。

（この事前のHPは以下のURLにて確認できます。）：
<http://www4.ocn.ne.jp/~kaneda/kenshu/bindex.html>

参加者からは、前述共有化促進モデル事業の成果でもある研究会HP（上記タイトル横のURL）上に、旅行後、多くの写真と解説（227枚・2008年12月20日現在）を投稿していただいた。筆者はそれらの写真と解説を利用した教材の開発を試みており、この教材開発こそが今回の研修旅行の最大の集約であると考えている。この共有化パワーポイント教材については、機会を見て後日紹介できればと考えている。このように、共有化をめざす研修旅行というコンセプトでこの旅行を企画し、実施した。

研修旅行の行程や見所は、先の事前のHPを参照していただくこととし、次に訪問地選定の狙いをお伝えする。

07年の経験から、開発と支援のあり方に揺れる熱帯雨林に暮らすティドン族のダガット村を本研修の中心に据え、なぜダガット村が開発に取り残されたのか、マレーシアの油やし立国の現状、発展途上の多民族・イスラーム国家の“現実”を社会科教員の“目”で見えて、感じることができる旅をめざした。さらに、かの地の環境教育の現状や開発弱者であるオランウータンをはじめとする森の動物を保護するセピロック・リハビリテーションセンターと、隣接するレインフォレストディスカバリーセンター（RFDC）を見学地に加えることで、様々なステークホルダー（利害関係者）の立場を立体的に見渡せるように配慮した。旅の最後に多文化の由来を歴史からくみ取る意味で半島部のマラッカを見学地に加えた。



①ダガット村の高床式の家々の平均的な間取り
 （市岡高等学校 櫻井洋先生作成・写真も共有化写真より）



②油やしプランテーションにて、消毒作業の実演の女性労働者（共有化写真より）



ここで、今回の旅のメインとしたダガット村について少し紹介する。セガマ川下流右岸に位置するエビ漁で生計をたてるこの村の起源はそう古くはない。村長アキが一族を引き連れてこの地を開いた。以前は別の地でワニ猟をしてワニ皮を売ることを生業としていたがワニの減少でこの地に移ったらしい。この付近は、タイのトムヤンクンの原料として珍重されるオニテナガエビが多く生息し、他のエビや汽水域の小魚の種類も多く、村のそここに植えられている熱帯性のフルーツと自生するパギス（熱帯のワラビ？）などで十分に自給自足できる豊かな村である（ダガット村の詳細は、事前のHP掲載の坪内俊憲JICA専門家・ボルネオ保全トラスト*事業責任者が発行されている英文冊子をご覧ください）。

保護区に指定され、開発に向かえないこの村の支援のありかたから、周辺の村の油やしプランテーションの現状、さらにはそこにつながるわれわれの日常とを明確に対比させることで、生徒に開発と支援の課題をリアルに提示できるのではないだろうかと考えた。

このような研修を中心に、社会科という教科の幅広い興味・関心を網羅できるような研修に仕上がったと確信している。

ここで、旅のハプニングを2点ほど、

*①いいハプニング 搾油工場で予定にはなかった油やしプランテーション見学ができ、採取法や薬剤散布の様子を取材することができた。

*②辛い？ハプニング フライトがキャンセルとなり車で3時間弱の別のタワウ空港からのフライトとなったが、その辛い移動途中の延々と続く油やしの“海（プランテーション）”に開発の現実を見せつけられた。

次に研修旅行後のアンケート結果（抜粋）をご覧ください。だきながら、反省と今後に向けて考察したい。

参加者の声

（複数の回答を筆者が集約）

*延々と広がる油やし農園。見るに圧巻であった。自然破壊そのもの。その中でダカット村の人々も、従来の生活を変えざるを得なくなっている。環境保護団体や政府になかば押しつけられるようにして、「観光」という生き方しか選べなくなっているのではないか。それがある

*BCTボルネオ保全トラスト (<http://www.bctj.jp/>)

から、森の利用を我慢しろと。しかし、私にはあの村が観光業でやっていけるとはとても思えない。しかも、彼らはすでに豊かな生活を知っている。知ればそれを求める。その展望を観光に見いだしていいのだろうかという疑問を持った。これは人権の問題、人権の基本は自己決定権。だから彼らが決めればいいことだ。しかし、ほとんどの選択肢をつぶしておいて、さあ選びなさいと言うのはおかしい。現実には、村の生活を維持することは困難だと思うが、それを模索する権利は、環境保護以上に尊重されるべきだろう。

*イスラームに関して教科書以上のことはあまり知らなかったので、ステレオタイプな認識を改めさせられた。

*コタキナバルからキナバル山への一日ツアーでは、焼畑を間近で見ることができたり、キナバル山の雄姿に感動した。

その他に、①『多文化社会の現実』を見た、②社会科教師の視点が組み込まれ、観光ではない研究会ならではの企画がよかった、③計画段階から積み上げてきたからこそこの旅行に仕上がっていた、昨年のJICA教師海外派遣の体験が生きている。

これらの感想から、参加者の満足も高く、実りある研修であったと実感しているし、今後の教材開発を通じて一層の“共有化”を推進していきたいと考えている。

次年度は、近隣の研究会にも呼びかけて実施できたらと願っています。興味のある方はHP等からご一報ください。



③ダガット村に別れを告げて・出発の時(セガマ川支流ダガット川にて) (共有化写真より)